

八戸の郷土玩具「八幡馬」と蒼前信仰

茂木明子

## はじめに

郷土玩具に興味を抱いたきっかけは、四十年前程前のこと、筆者が勤務していた成城大学民俗学研究所に、白井毅教授蒐集の郷土玩具コレクションが寄贈の運びとなり、同教授の話聞きながら整理を行い、当時の森岡清美所長の発案により昭和五十九年から展示することになってからである。

郷土玩具は、我が国の庶民が生み出した、日本人の心と生活が見える伝統文化である。中でも、種類・量ともに最も多く作られるのが馬にかかわるものである。馬を象った郷土玩具は、信仰・生活文化と深く関わり、全国各地で様々なものが作られている。人々は、馬の無事や健康を祈り、他方では子ども達の尚武の心や立身出世の願いを込めて、木・張子・土・わらの馬を作り、守護としてきたのである。

馬や馬形が出現する祭り・民俗行事を実見すべく東北地方を中心に訪ね歩いた。岩手地域の馬形の出る祭では、わら馬を農神に供えるが、農神はこのわら馬に乗って田の見回りをするという伝承が残っている。民俗行事で利用されることの多いわら馬や木馬は特に信仰の要素が強い。そこに見られる祈願は雨乞い、豊作、子供の健やかな成長、病氣平癒、疫病除にとどまらず、商売繁盛や縁結びまで幅広い。馬は日本人の信仰・生活・民俗行事と深く結びついており、神仏への祈願を絵馬・木馬・わら馬などに託した昔の人々の心が実感として伝わって来た。とりわけ良馬を産出してきた馬産地である東北地方には、馬の玩具が多い。郷土玩具の「日本三駒」と称される木馬、青森県八戸の「八幡馬」・宮城県仙台の「木下駒」・福島県三春の「三春駒・三春子育木馬」は、何れも昔の馬産地という背景を持ち、古くからの伝承と信仰に連なる縁起を持っている。

一方、製作者側から見ると、古くから副業として作られてきたという性格から、廃絶したものも多い。しかし、今でも家や地域の伝統を守り続けようとしている製作者もいる。製作者との語らいや見学から、継承とは形だけ



写真1 八幡馬の猿乗り（赤星平馬旧蔵品）

ではなく、先人の苦勞や心、伝統の重みや力といったものを受け継ぐことかもしれないと思ったものである。

筆者が、郷土玩具の馬の中でも特に八幡馬を取り上げたのは、数年前、赤星平馬（明三九〇平五）蒐集品（現・成城大学民俗学研究所蔵）である猿が乗っている古色蒼然とした木馬を目にした時、その何ともいえない愛らしさと一刀彫の造形の素晴らしさに心惹かれたことが端緒であった。文献資料の検索を通じて、八戸の郷土玩具「八幡馬の猿乗り」とわかった。そこで、八戸の筐子で唯一人伝統的な技法「鉞削り」で八幡馬を製作している大久保直次郎氏に当該木馬の割れなどの修理をお願いした。八戸の同氏のお宅に伺い、ご夫妻の人柄に触れられたことも八幡馬が好きになった一因である。馬の守護神である「猿」が乗っているこの木馬は、百年ほど前に八戸の山村で作られた古い八幡馬であることがわかった。

また、発祥の地・天狗沢最後の製作者の子孫宅を偶然に訪ねて、創始者である孫作の古い分家・孫四郎家の子孫である前田貞直氏夫妻との邂逅があった。そこで、同家で「サルノリ」と呼ばれている武者顔の貴人が騎乗する古い八幡馬を拜見、さらに同家から榊引八幡宮に奉納された貴人が騎乗する古い八幡馬のサルノリを同宮で見せて頂くことが出来た。

八戸の郷土史家・小井川潤次郎<sup>1</sup>の著作から八幡馬の起源伝承もわかり、小井川が蒐集した古い八幡馬コレクションをご遺族から見せて頂いた。その際に、ご子息の年夫氏から十和田市馬事公苑称徳館のことを聞き、早速見学に行き、展示されていた蒼前神像を見ることができた。

「八幡馬」を生んだ八戸は、古くから駿馬の郷として知られていた馬産地であった。当地方では、厩や家の中の神棚に馬の守護神とされる蒼前神を祀り、馬の健康や安全を願う蒼前信仰が古くから根付いている。

蒼前信仰について、柳田國男は、明治四十五年に「勝善神」<sup>2</sup>を著した。「奥

州にソウゼン或はオソウゼンサマと云う神あり。馬の保護神なるに似たり。此神の由来を明にしたき希望を持ちて（中略）木下村の蒼前の如きは本社にして飾馬の參詣夥しとあり。……」と文献や地名などから蒼前神の信仰は、少くとも時代を前後して日本中に普及していたのではないか、ソウゼンが源であったのではないかと推測している。また、駿府の猿屋町に住む猿引の頭である猿屋に言及、「正五九の三月猿引は厩に参り勝膳経を讀誦して猿を舞しめ祈禱を為す。是れ馬に病災無らしむる也云々（中略）猿を以て厩馬安全の手段とすることは廣く且つ久しき風習なり」と馬を守護するといわれる猿についても論述している。柳田が推測しているように昔は日本中にあつたのかもしれない。しかし、現在では蒼前神は東北地方独特の馬の神といわれる。特に、古くから全国有数の馬産地として生きてきた南部地方には、蒼前様への篤い信仰が各地にみられる。

本稿では、八幡馬の源流を探りつつ、蒼前信仰の関わりについて考えてみたい。  
なお、筆者の実地調査は、平成二十三～二十九年にかけてのものである。

## 一、南部の蒼前信仰

南部地方とは、江戸時代に南部氏の所領（盛岡藩と八戸藩）であつた陸奥の国の北部地域をさし、藩政時代において盛岡南部藩が九牧を管理した全国有数の馬産地であつた。

南部の馬に関する神社や祠の名称は、蒼前、馬頭観音、駒形、氣比などがあるが、蒼前は良馬生産を願ひ、馬頭観音は馬を供養する神とされている。特に右手県北部から青森県東部にかけての旧南部藩領には、神社や祠、地名などに蒼前が今も色濃く残っている。また、盛岡藩牧があつた七戸町や南部町、八戸藩牧であつた妙野に隣接する階上町などにも「蒼前」という地名が残っている<sup>3</sup>。

## (一) 南部の蒼前信仰

平安時代末期の寿永三年(一一八四)に起きた宇治川の合戦の先陣争いの馬はいずれも南部馬であったといわれ、武将達は、こぞって南部馬を求めた。南部は名馬・駿馬の郷として知られ、軍馬や献上品として全国に送られていった。近世の藩政時代に入ると、馬の生産は藩主導で行われた。畑作と畜産に頼らざるを得ない南部の農家の生活は苦しく、馬は貴重な財産でもあった。経済力や家格の高い名主の家や旧家では、人の住む母屋と厩とがL字型になってつながる「南部の曲り屋」と呼ばれる住居で、馬は家族の一員として大切にされ、馬を飼っている農家では、馬の健康や安全を願い、家の中の神棚に馬の守護神とされる蒼前神を祀り、厩に絵馬を掲げたのである。<sup>4)</sup>

## (1) 蒼前神

南部の蒼前神は、「オソウゼンサマ」「オシヨウゼンサマ」と呼ばれ、蒼前、惣善、宗前、宗善、相前、勝善、聖前、正前、正善など多様な字があてられている。南部各地に蒼前神社や蒼前様だという祠・堂が多数見られ、祭日には馬の無病息災、繁盛を祈願する人々が参詣に訪れている。<sup>5)</sup>

十和田市馬事公苑称徳館には、鎌倉時代と伝わる蒼前像をはじめ、種々の蒼前様が展示され、会場におかれた展示解説シート(十和田市称徳館信仰館No1)には、「蒼前神は、東北地方独特の馬の神です。関東以西には例がありません。文献がなく謎の神ですが、蒼前のほか、宗前、相善など、いろいろな書き方をする事から、漢字が日本に入る以前からの神ではないかともいわれます。その由来には、古代、天皇が正月七日に愛でた白馬をソウゼンということを起源とするなど、諸説があります。」と記されている。

蒼前様の神像であるが、称徳館に展示されている多くは貴人の騎乗姿であった。氣比神社の絵馬堂にも、馬を飼わなくなりお祀りをしなくなった家々等からであろうか、奉納された蒼前神像が安置されていた。

材質は、木が多いようだが、石・鉄・陶器などもある。

青森県下の蒼前様を多数見ている滝尻善英氏（青森県文化財保護協会副会長、八戸市文化財審議委員副委員長）から、「一番多い蒼前像は、馬だけの像です。典型的なのは、武人或は公家に乗っている騎馬像です。また、頭に馬が乗っている馬頭観音を蒼前さまとして祀っている所もありました。共通点は、馬をあしらっていることです。」と教示して頂いた。なお八戸における蒼前神像については、後述「八戸の蒼前信仰」を参照頂きたい。

(2)木ノ下詣り——気比神社への参拝と絵馬市——

青森県上北郡おいらせ町の旧郷社気比神社は、昔から「木ノ下のお蒼前様」といわれ、南部地方の馬の守護を祈る信仰の中心地で、盛岡藩営牧である南部九牧最大の牧野「木崎野」があったところでもあり、元は絵図に「正善」と記されていたという。古くは正善（勝善）堂、蒼前堂、馬頭観音堂と称したこともあったが、明治維新の神仏分離により現社名に改称した。祭日は、旧六月一日と同十五日で、岩手・秋田・山形県からも馬を連れて沢山の人が参詣にきたという。創建については、伝承により文明九（一四七七）年六月一日の建立という説もあるが、気比神社拝殿の額には、寛永十六（一六三九）年に木崎野の馬護神を祀るために建立されと記されている。明治初期編纂の『新撰陸奥国誌』には、馬も人も着飾って大いなる賑わいを呈した。絵馬を厩に掛けておくと良馬を得られ、馬がこの神社の境内を踏めば病氣にならないと記されている。同社の蒼前様について、三戸・八戸地域では、「階上蒼前様の妹分だとされ（中略）本尊は、烏帽子直垂姿の武者が馬に乗っている像で、鉄製、高さ十五センチほどである。木ノ下の農民が、この地で穴を掘っていたさい、土の中からピカピカ輝く黄金の像が出て来たため、これを敬い祀ったと言ひ伝えられている。（中略）祭神は足仲彦尊（仲哀天皇）を祀ることになった。昔は、馬をきれいに着飾らせて大きな鈴をガランガランと鳴り響かせながらお参りしたそうさ。いわゆる『木ノ下馬ッコ』で、盛岡では、『チャグチャグ馬コ』という。」<sup>8</sup>因みに「チャグチャグ馬コまつり」を行う岩手県滝沢



写真2 氣比神社の絵馬市 (平29.7.1)



写真3 氣比神社の絵馬堂に奉納された蒼前様



写真4 孫四郎家の絵馬

市鬼越蒼前神社（駒形神社）では、旧端午の節供には農作業を休み、馬も休息日とした。將軍家馬揃えとも重なる旧暦の六月十五日には、愛馬に鈴や美装を施して蒼前神社に参詣し馬の息災延命を祈願したのである。

氣比神社の例大祭は、平成十二年頃から毎年七月第一土曜日・日曜日に開かれ、境内に絵馬市が立つ。昔の絵馬は木製であったが大正期に紙絵馬となり、牛や馬、豚を描いた絵馬を売る露店が出ている。県内外からくる参拜者は、露店で自分が飼育する家畜に似た体格や色の絵馬を選んで購入して、細かな特徴や名前などを絵馬師に書き足してもらい、神前に持って行く。前年の古いお札と絵馬は神社で処分してもらい、新しい絵馬とお神酒を持って神社拜殿に行き、お札を授与してもらったり、絵馬に「魂入れ」をしてもらう。この後、再び絵馬売りのもとに戻り絵馬を包んでもらう。持ち帰った新しい神社のお札と絵馬は、厩、牛舎、豚舎に一年間飾るのである。お神酒の半分は神社に奉納して残りを境内等で飲んだという。十和田市から来た絵馬師の五代目三浦教明氏は、「今は、売れるのは九割方牛の絵で馬は一割位ですかね。先代が描いてストックしている馬の絵が売れてしまったら

終わりですかね。」という。かつてのような賑わいは見られなくなり、牛馬の守り神のみならず、交通安全の神様としても信仰されている。

青森県無形民俗文化財等保存活用委員会編纂の報告書は、「氣比神社の絵馬習俗は、必ずしもソウゼン信仰の古態を残しているわけではない。氣比神社は「馬の神」として信仰され、馬の絵ばかりが奉納されていたが、今日では周辺地域の畜産業の変化に伴って牛の絵が主となり、また豚の絵も加わっている。(中略)氣比神社の絵馬が、単に生物としての馬ではなく、『参詣者自らが飼う家畜』としての馬を表していたために生じた展開と考えられる。」と記している。

## (二) 八戸の蒼前信仰

### (1) 八戸の馬産

江戸時代の八戸藩には、妙野牧と広野牧という二つの藩牧があり、各ムラ共同で管理する牧場として七百組の民牧があったという<sup>10)</sup>。

八戸は、古来から糠部(ぬかのぶ；青森県東部・岩手県全域)の駿馬の産地として全国に名を馳せていた。明治になってからも良馬の産地として知られ、明治十年の統計では、五人に一頭の割合で馬がいたほどである。輸送馬、軍用馬、競走馬の需要とともに農耕と堆肥をとるためにも重要視され、馬は農家にとって生活上欠くべからざる存在であったのみならず、馬産という八戸最大の産業をうみだしていたという<sup>11)</sup>。しかしながら、妙野牧の休野以後、放牧飼いや厩舎飼いが主流となり、八戸の馬は体格的に劣るようになった。それでも軍馬は高額で取引されたのであるが、昭和十五年以後、我が国の軍隊も機械化が進み、軍馬の需要が激減した。さらに二十年以後は、農業用化学肥料が量産され堆肥の価値も薄れ、三十年代になると農業用機械の普及で農耕馬としての価値が失われてしまった。そして四十年以後には千年の歴史を有した糠部の馬産は終わってしまったのである<sup>12)</sup>。

## (2) 八戸の蒼前様

この地方の馬と関わる信仰の中心地は、階上蒼前神社と木ノ下蒼前様（現気比神社）である。

青森県の一般的な農家は、「直屋<sup>すこや</sup>」と呼ばれる長方形の様式で、入口から入ると土間があり、片側が母屋で反対側に住宅の三分の一くらいの厩が占めているように、馬は家族同様に大切にされた。蒼前様を祀る社・堂、小祠が村のあちらこちらに出来て蒼前信仰も広まったのである。馬を飼っている農家や牧場では、馬の保護神として崇祀しているものをすべて「蒼前」と呼び、厩の神として祀っていた。馬生産者や牧場主は敷地内に個人で供養塔を立てて祭祀することもあり、馬を飼育している家では、馬のご神像を神棚や厩に祀った。また、気比神社の縁日には馬を着飾らせて「木ノ下詣」をしたものである。<sup>13)</sup>

蒼前信仰が地域に浸透していた頃は、蒼前様を祀る社・堂、小祠が村のあちこちに出来ていたが、昭和三十年代以降は、蒼前信仰も衰微してきたというのが現在の状況である。しかし、今も蒼前様を祀っているムラでは、地域全体を守護する神となっている。また、牛を飼う地域では、牛の守護神として信仰されている。貴人や武人が乗った神像もあるが、駿馬や愛馬を象った神像もある。旧家には、八幡馬の蒼前様もあった。

## ① 地域の蒼前様

地域で蒼前様として祀られている神像について、若干の事例をあげておく。なお、文献からの事例は、註記（家々の蒼前様も同様）した。階上蒼前平の蒼前神社と櫛引の上矢倉蒼前神社は、筆者が実見したものである。

## 【神社・小祠の神像の事例】

・階上蒼前平の蒼前神社……：鋳物の男女一对の貴人の騎馬像。

草創伝説に因み、片足が折れており、どんなに繋いでもすぐにとれてしまうと言い伝えられている。現在のご神体は、旧ご神体を模倣して作った木彫騎馬像であるという。

太平洋戦争中は、軍馬が不足して農耕馬や荷駄馬まで戦地に送られることになり、軍馬としての資質を備えていたのが、古くから「妙野牧」であった階上地方の馬であった。この地に蒼前神社が鎮座しており、近隣や気比神社まで行かない家は参詣に来て賑わっていたという。<sup>14</sup>



写真5 榊引の上矢倉蒼前神社、小祠の蒼前様



写真6 同上

- ・花崎の蒼前様……石の騎馬像。昔は、花崎館の鬼門を守る毘沙門堂だった石殿で、周辺は馬捨て場であった。<sup>15</sup>
- ・榊引の上矢倉蒼前神社……宇気母智神が祭神。小祠に貴人の騎馬像。榊引の秋葉神社を移したとされる。<sup>16</sup>
- ・榊引の大谷地蒼前神社……赤の木彫駿馬像。岩沢政家の裏山に鎮座。<sup>17</sup>
- ・新井田の塩入水天宮の蒼前様……木彫駿馬像。<sup>18</sup>
- ・十日市の熊野神社内の蒼前様……木彫葦毛馬像と白馬像<sup>19</sup>（一対、厨子入）。
- ・河原木の日計蒼前神社……駿馬像と牛像。<sup>20</sup>

## ②家々の蒼前様

馬を飼育する農家や牧場では、厩の神として蒼前様を祀っていた。馬を飼わなくなった家では、厩から台所の神棚に移して祀っている例もあるが、厩ではなく最初から家の神棚に祀る家もあると聞く（先述の滝尻善英氏談）。



写真7 上野家の蒼前様

櫛引通清水の清水治五右衛門家、山伏小路の上野末藏家の蒼前様については、話を聞き、見せて頂いたものである。

【旧家の蒼前信仰】

櫛引の通清水には、「オオヤケ」（大本家、旧家）と言われる古い家筋の家が二軒あり、それぞれ産土神を祀っている。その一軒である清水治五右衛門家では、戦前に軍馬の飼育もしていたが、戦後も馬がいた。三十年前位には競走馬を数頭飼っており、天皇賞に出場予定であったが直前にケガをして出られなくなった馬もいた。厩祈禱には、下北から回ってきた人があり、祈禱の際には、米・リンゴ・ニンジン・ごぼうなど七色のお供えをする。お札を頂き厩にはった。回ってくる人が来なくなつてからは、別当をしているカマド（清水家の分家）に頼んだこともあったが、父親の三千雄が祈禱していたこともあった。<sup>(21)</sup> なお、清水家の台所の神棚には、かつては厩に祀られていたという烏帽子直垂姿の貴人がまたがった八幡馬（厨子入り）と馬の木彫が「蒼前様」として祀られている（九三頁写真26・27）。また、氣比神社の絵馬や相馬中村神社祈禱神符も共に祀られていた。

【家々で祀る蒼前様の事例】

・金浜の蒼前様……木彫騎馬像二体（厨子入）、福島県相馬の吉田神社の陶器の馬、八幡馬、三春駒。

山伏小路の上野氏の金浜の実家では、馬を三頭飼つており、厩に蒼前様を祀っていた。旧暦の六月一日早朝には「木ノ下のお蒼前様」に、馬に腹ストや鈴をつけてお参りに行ったものである。上野家では、二頭を馬小作に出していた。馬小作とは、競走馬作りの馬を預けて、子を生まれ、その仔馬を売った時の代金は、貸主对小作が六対四で分配した。<sup>(22)</sup>

・上長地区の表河原宗前宮……木彫駿馬像。小笠原菊美家の裏手に鎮座。例大祭は六月十五日で、その時には地域の人々も集まる。かつては牛馬を飼っており、昭和二十六年に皇太子（今上天皇）が来八した際、小笠原菊松の愛馬「菊花号」の馬毛で製作した八幡馬を献上したともいう。

・十日市の畑中徳藏家の三神小祠の蒼前様……木彫駿馬像と貴人の騎馬像<sup>24</sup>。

・妙の久保武雄家の蒼前様……木彫騎馬像。昔は、小祠があり、その中に祀られていたが、小祠が古くなったので母屋の神棚に移した<sup>25</sup>。

・河原木の中村弘志家の蒼前様……木彫馬像。父の体調が悪かった際に、カミサマ（祈禱師）のお告げで、小田八幡宮の蒼前様を分霊してもらい、木彫の馬像に魂入れをして、納めたという。その馬像は、木版を馬の型に切り取り、板の上に立てた簡単なつくりであるという<sup>26</sup>。

## 二、郷土玩具「八幡馬」の発祥と製作者

### (一) 故事来歴

青森県八戸市の代表的郷土玩具で、木馬の名品として知られている「八幡馬」の創始であるが、畑野栄三によると「八幡馬の由来書には、『承久二年（一二三〇）に京から一人の木工師が旅して来て是川村の天狗沢に住みつき、ここで木工や塗り物を業とした。ところが部落の溜池の水換え作業の際に、泥の中から馬形の木片を拾い、それを手本に木馬作りを思い立った』と記されている<sup>27</sup>とあるように当初の製作地は天狗沢であったが、昭和三十年代で途絶えた。

一方、明治初年から、隣村の笹子に住む大久保家が、農閑期の副業として、伝統的技法の「鉈削り」で木馬を作り始めた。現在も、伝統に従って手作りりで一体ずつ作っているのは、大久保家四代目の直次郎氏だけである。



写真8 櫛引八幡宮秋季大祭で、八幡馬を売る大久保直次郎氏



写真9 櫛引八幡宮秋季大祭

昭和二十九年には、高橋利典氏が機械製作の八幡馬製作会社を設立して製造販売を行っている。

## (二) 櫛引八幡宮との絆——愛馬の安寧と子どもの守護——

櫛引八幡宮は、元は根城ねしろの南部氏の祈願所であったが、後に盛岡の南部氏がこの地を治めるときに直轄した神社で、南部一宮になっている。同宮の八幡馬についての解説では、「江戸時代、南部藩は馬産で藩財政を賄うため、櫛引八幡宮で馬市を開いていた。売られていく愛馬の安寧を願い、その身代わりにつくられたのがこの木馬で、のちに郷土玩具になったものと思われる。木馬に描かれている模様の由来は、『流鏑馬のときの馬に飾りを表現したもの』『馬に乗って嫁入りした際、馬を飾り立てた様子を表現したもの』との二説がある。」と記されている<sup>28)</sup>。同宮神職の高島常美氏（六十三歳）によると、生きた馬を奉納する代わりとして、木馬をお祀りしたものと言う。また、「八幡馬」をやワタウマと言いい、八幡駒と言わない理由は、「駒」は若々しい牡馬に対する言い方であって、この木馬はオス・メス両方を意味するから「ウマ」なのであると言われる。

馬の守護だけでなく、子供の守護としても同八幡宮参詣者などに人気を博したという。三上強二は、名称からみても、櫛引八幡宮と深い関わりがあることは明白である。かつては、八幡馬を購もめて、神社で祈願したものを家に持ち帰って神棚に供えたもので、子どもの数だけ購もめて一年間無事に過ぎる

と、それをまた神社に奉納して、新しいものを購めるということであつたやうであると述べている。<sup>(20)</sup>

小井川は、昔からずうつと続いて来ているものはやはりあの「馬うまこ」「八幡馬やわたうまこ」であつた。榊引八幡宮は建武の昔から流鏑馬の神事が行われたので、八幡馬をこの流鏑馬にひつつけて考える人が多いが、そうかもしれないと言いつつながらこつそり別のことを考えている。勿論記録はお宮に何一つない。八幡馬ももとは子供こどもの丈夫に育つやうになどというつもりであつたのであろう。それは、男の子供の数だけ買って来て牽かせたことにその名残は認められるが、あとでは専ら馬の安泰を祈つた事だと考えている。この地方では馬というものが大きな位置を占めているので、南部では絵馬というところほとんど全くが馬になつてその馬が馬の祈願になつていたのである。八幡馬もそうしたような経路をたどつて今日ではただの玩具といつたやうになつたが売買するのを見ると馬の値のように三十両とか五十両とかいう額で売買してたと述べている。<sup>(20)</sup>

榊引八幡宮神職の高島氏や三上、小井川が謂わんとしたことは、「馬うまこ」(後の「八幡馬やわたうまこ」)は、絵馬と同様に、人々の強い願望や祈りが込められたもので、その源流は昔から馬が担つていた信仰にあつたといふことであらう。

### (三) 創始者・天狗沢の孫作

(1) 孫作一族の来歴と天狗山神社

八戸西方の山間地・是川の天狗沢に住み着いた木地師・孫作の一族の当主は、代々孫作を名乗り、家業は、千遍塗の漆器作りであつた。小井川は、孫作の家は、家伝では五戸在の前田から天狗沢に移つてきたと言つてゐるが、山から山へ渡つて歩いた山人の居着いたものだと考えており、笹子もその姻戚にあたつてゐるといふ。天狗沢は「隠れ里」と呼ばれ、山間の上是川にあつた。孫作家に素晴らしい馬の絵があつた。清水寺せみずじの檀頭だんとうをしており、寺には重箱や吸物椀が残つてゐる。八戸の西二里館村大字八幡にある榊引八幡宮で、八月十四・十五日の流鏑馬がでる大祭時に売る八幡馬は天狗沢で作つたものであつた。昭和初期に多く作つてゐたのは、笹子の大久保



写真10 天狗山神社



写真11 同左

倉松（明六〜昭十四）であり、天狗沢は前田善次郎（明二十〜不明）であった。孫作の家では、塗物をやる片手間に若い者らの小遣い銭とりに作らせたのだと伝えている<sup>(1)</sup>。

孫作の本家は、八戸藩主から特に苗字帯刀を許された家柄で「オイ」の屋号でよばれ、豪農などの言葉で言い表せないほどの財力があり、隆盛をさわめた。耕作時には五十頭を越す荷馬の行く様は壯観であったという。ところが、何代目かの孫作の放蕩三昧で家運を傾け、膨大な財産を失い、血統も絶え、豪邸も昭和三十年代に姿を消したという<sup>(2)</sup>。昭和三十年代の天狗沢には、三系統の前田姓が十五軒程あった。その筆頭は、孫作系統の「オイマキ」で、屋号でいうと「オイ（孫作本家）、サトウ（孫四郎家）、サトウカモ（マ）ド（孫四郎家の分家）、カモ（マ）ド、シモ、マイコ、ハタケナ」の七軒で、清水寺の檀家になっている<sup>(3)</sup>。

天狗沢には、前田孫作が一族の守護神として建立した「天狗山神社」が鎮座している。社伝によると創建は、永仁元年（一二九三）で、六度再建している。祭神は猿田毘古大神、例祭日は十一月二十三日である。孫作本家の没落で一時人手にわたっていたが、姻戚の前田英憲宮司の父が買い戻して例祭日に祭典を行っている。

## (2)天狗沢・最後の八幡馬製作者

孫作の江戸初期頃の分家といわれる孫四郎家では、孫作の本家があった場所に、「八幡馬発祥の地」と刻んだ木碑を建立した。現在の石碑は、現当主の前田貞直氏（昭二十六生）が平成二十八年四月に再建したものである。

孫四郎家は、根城南部氏が遠野に移った寛永四年（二六二七）頃に、孫作の「家来カモ（マ）ド」（分家、孫作の娘婿か、元は佐藤姓）となった家で、貞直氏の曾祖父である長松（明十二〜昭二十八）とその父菊松（安政四〜昭十二）の二人で昭和十年代まで八幡馬を作っており、長松の弟の與吉（明二十七〜昭三十八）は昭和三十年代まで作っていた。與吉は器用な人で、樵や農業のかたわら八幡馬作りや漆塗りをしていた天狗沢最後の製作者である。與吉は、一番手先が器用な甥の長吉（大十二〜昭二十一、長松四男）を八幡馬作りの後継者にと勧めた。長吉は、サルキチとあだ名されるほど馬好きで、家出をして競馬の騎手になり、見習騎手のまま、昭和十八年日本ダービ



写真12 天狗沢の孫四郎家（孫作の分家）と敷地内に建てられた石碑「八幡馬発祥の地」



写真13 大久保家



写真14 八幡馬（大久保岩太郎作）

一に騎乗して優勝、二十歳で三冠を制した。しかし満州に出征、戦後シベリアに抑留され生還できなかった<sup>(34)</sup>（享年二十三）。

#### （四）笹子・大久保家における八幡馬の製作

##### （1）大久保家代々の製作者

笹子は、天狗沢と徒歩三十分位の距離に位置し、屋根の葺き替えなどの相互扶助を行う隣村である。江戸末期に生まれた大久保家の初代重吉は、溜池の泥の中から馬形の木片を拾い、それを手本として、明治初年頃の十六歳の時に創作したと伝える。小井川は、天狗沢の孫作一族の姻戚（先述）とも言っている。

この木馬は、天狗沢・孫作の木馬と全くの同形というわけではないが、農閑期の副業として製作された。

赤松の木を鉋やノミで削り、ニカワでとかした鍋ススを塗り、本物の馬の毛を植え、乗馬の盛装姿として千代紙で飾り、あぶみ手綱や鈴を表現する点々を描いた素朴なものであった。徐々に種類も増え、当初の黒馬のほか白馬、赤馬、背中に人や猿を乗せた馬、台車の上に大小の親子馬（或いは夫婦馬）が乗っている遊び用のものも作られ、榊引八幡宮参詣者に人気を博した。直線加工の鉋を使い、胸や腹部分には曲線加工をして、千代紙を貼った木馬は傑作とされ、次第に高い評価を受けて、大正時代末頃から有名になっていった。重吉は、創意工夫を重ね「八幡馬」製作の基礎を築き、大正十一年に七十八歳で死去した。第二代の倉松は、明治六年に生まれ、先代の後継者として高評価を受け始めた八幡馬製作の中心となり、基礎固めを行い、昭和十四年六十六歳で死去した。第三代の岩太郎は、明治三十六年に生まれ、最盛期には沢山の八幡馬を作り、名人といわれた。しかし、戦中戦後の混乱や馬産業の衰退により、郷土玩具を求める人は減少してきた。昭和三十五年頃までは、「八幡馬」を作っている親戚が三軒あったが、撤退を余儀なくされた。そのような中、一人で伝統を守っていたが、昭和四十六年に病気になるまで六十八歳で世を去った。

## (2) 伝統を継承した四代目・直次郎氏

大久保家四代目・大久保直次郎氏は、昭和十七年に七人兄弟の四男として生まれた。奇しくも午の年であった。子供の頃、色塗りの手伝いはしたが、作り方を教わったこともなく、継ぐなどということは考えてもみなかった。北海道でとび職をしていたが、二十九歳の時に父岩太郎が亡くなり、家に帰って父の遺作を目の当たりにし、初めて「いいなあ」と思った。その上、注文品も残っていたので、米作りをしながらの「八幡馬」製作を継承する決意を固めた。当初は失敗も多く、材料は風で乾燥させてから使うのであるが、時期によっては縦に線が入り割れたこともあり、梅雨の時期に板を切り出し、ボンドで割れを防ぐなどの工夫をするようになった。また、木の目を見て削らないと「ガバツ」と削れてしまうので、五年位は無我夢中で苦勞も多かった。木材は、昔は赤松であったが、今は節のない正目の桂（赤肌）と青森ヒバ（白肌）を使う。切り出しに鋸を使うが、腹と脚はノミで



写真15 工房で作業をする大久保直次郎氏



写真16 八幡馬の白木と親子馬（大久保直次郎作）

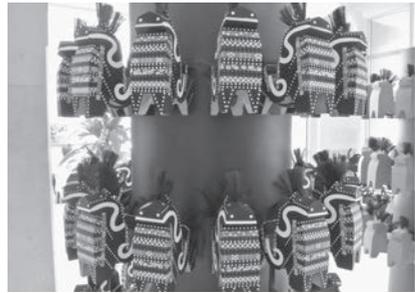


写真17 「はっち」の「八幡馬列柱」

削り、殆どは鈍で削る。木の選択から鈍彫り、タテガミや尾の取り付け、色塗り等の作業を一人で行っている。「一番難しいのは胸で、親父の代までは腹がまつすぐに胸もストンとしていたが、自分は柔らかい胸のふくらみが出るように、丸みをよけいにしました。この丸みが一番気を遣うところです。飾りは、花嫁が乗った馬の飾りと言われ、白い点々は鈴を表しています。昔よく作ったのは、台車に乗った親子馬です。黒馬と赤馬は夫婦あるいは親子を表し、白馬は御神馬です。『猿乗り』は、顔は赤いが目などはなく、頭に猿の毛を模した兎の毛をつけています。結構手間がかかっております」と語る。

八戸市の八戸ポータルミュージアム「はっち」の入り口に作られた六本の「八幡馬列柱」には、直次郎が作った黒・赤・白木の八幡馬が二八八体びっしりと取り付けられている。製作に一年以上を要したという。八戸で唯一鈍削りという伝統的な技法で八幡馬を作り続けることが評価され、伝統的工芸品産業功労者褒賞、青森県文化賞などを受賞した。現在は、青森県伝統工芸士に認定されている。

樺引八幡宮の例大祭の日には、長野県松本市に住む娘の優子氏も一家で帰り、両親と共に境内で出店している。優子氏は、年に数回里帰りして作業を手伝い、また技術専門学校の木材工芸科で学び、糸鋸や彫刻刀を使いミニサイズの「八幡馬」を松本で作っている。夫君の理解と激励もあり子育てをしながら、「四代続いた伝統を途絶えさせたくない。一生の仕事にする。」と決め、会社勤めをやめたそうである。

### 三、八幡馬の源流——八幡馬と蒼前様——

これまで述べてきたように、郷土玩具の八幡馬は、樺引八幡宮でかつて開かれていた馬市で、売られていく愛馬の安寧を願い、その身代わりにつくられたといわれている。また、子どもの守護を祈願したものであった。他方、八戸地方の馬に関わる信仰で、最も広範に篤く信仰されているのは、馬を守護する蒼前様である。八幡馬の

源流を探索するにあたり、本稿では八幡馬の古形とされるものから考察して、併せて蒼前神との関係を明らかにしたい。

## (二) 八幡馬の古形と「サルノリ」

八幡馬の形も創始期のものは、胴が長くて足が短い。首も長く、胸がスーと伸びて口が薄いものだったという。これは、北海道の「ドサンコ」という改良されない時代の馬の形だとい<sup>(35)</sup>う。

筆者は、八幡馬の古い形と言われるものを三種確認出来た。一つは、象られた動物の猿が乗っている「猿乗り」と呼ばれるものである。今一つは、人形（貴人・武者顔の貴人）がまたがっているもので、創始者一族の家で「サルノリ」と伝えられているものである。もう一つは、小井川潤次郎蒐集品にある明治期に作られたという騎乗者のない馬である。

なお、「猿乗り・サルノリ」という名称であるが、猿を象った動物が乗っている八幡馬を郷土玩具関係書物では、「猿乗り」と表記しているのにならない、本項でも同様にした。人形がまたがっている八幡馬については、郷土玩具の書物には掲載されていないものである。従って、呼称のカタカナ表記にした。

### (1) 馬に猿が乗っている「猿乗り」

武井武雄は、八幡馬について「八戸の八幡駒」と記して、古くは黒駒で朱の点々がうってあった。古型の特徴は、眼に金紙又は銀紙の菱形に切った物が張られてあり、尾はピンと立っている。型の異種としては横に仔馬を連れているものもあるが、最古からあるものは猿が乗っているやつであろうと述べている<sup>(36)</sup>。この武井説を基に検証すると、冒頭の「はじめに」で記した赤星平馬旧蔵の「猿乗り」の形状は武井の記した通りで、しかも簡略化される以前に作られた一刀彫の愛らしい表情の猿が馬に乗っているものである。畑野栄三が著した『全国郷土玩具



写真18 大久保家製作の八幡馬の猿乗り

ガイド①』に、名人と言われた大久保家三代目の岩太郎作の初期の猿乗りが二種掲載されており、その古風な方に類似している。おそらく百年程前に、笹子の大久保倉松かその姻戚が作ったものではないかと筆者は推測している。古形の名品であることは間違いない。

櫛引八幡宮に奉納されている「猿乗り」は、大久保家が製作したものであるが、猿の頭に兔の毛と言われる白い毛が付いている。これは、一刀彫の猿が騎乗しているものの次の形であろう。大久保直次郎氏によると馬に人形や猿を彫って乗せるのは、手間もかかり、技術的にも難しいという。

小井川は、先述の武井説の『日本郷土玩具(東の部)』に掲載されている「猿乗り」(先述の櫛引八幡宮のものによく似ている)は、笹子の製作で大正八・九年の頃三十ばかり作って大阪へやったというものの一つらしい。また、掲載した写真の猿乗りが最古かどうかには大きな疑いがあると指摘しており、筆者も小井川説と同じく武井が掲載した写真の猿乗りは年代的にも形態的にも最古の形とは思えない。

(2)馬に人形がまたがっている「サルノリ」

人形が馬に差し込まれるように作られている「サルノリ」は、人形の手にくばみがあり、手綱を持つようになっている。

(A) 孫四郎家の神棚の「サルノリ」(貴人が騎乗)

今はなき天狗沢の孫作本家(前述)の隣地に、孫四郎家の屋敷はあり、前田長一(孫四郎家の四十七代目 昭和三〇平十八)家族が住んでいた。櫛引八幡宮神職の高島氏は、昭和五十八年頃前田家の神棚を取り壊すにあたって、宮司と一緒に出向いた。その時に、烏帽子、直垂姿の貴人がまたがっている古い八幡馬を発見して「あっ、サルがいる」と叫び、その八幡馬を奉納して頂いたとい



写真19 孫四郎家の神棚に祀られていた八幡馬のサルノリ(櫛引八幡宮への奉納品) A



写真20 同左



写真21 孫四郎家の床の間にあげられていた八幡馬のサルノリ(前田貞直氏所蔵品) B



写真22 同左



写真23 天狗沢の孫作・前田松次郎製作、八幡馬の古形(小井川潤次郎旧蔵品)

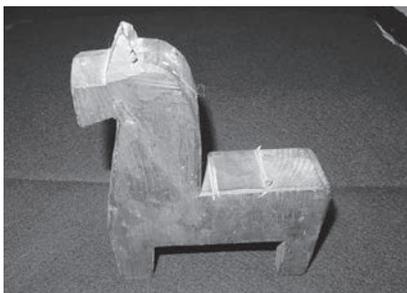


写真24 明治時代に作られた八幡馬(小井川潤次郎旧蔵品)

う。現在も同宮に「前田長一家の神棚にあつたサルノリ」として保管されている。長一の長男貞直は、あの家は昭和二十八年に建て替えた家で、その神棚は台所にあつた馬用の神棚で、建て替え以前は厩に祀られていたものかもしれないと言う。

(B) 孫四郎家の床の間の「サルノリ」(武者顔の貴人が騎乗)

昭和四十九年、結婚により天狗沢を離れ、田向に居住している前田貞直家にある烏帽子、直垂姿、武者顔の貴人の人形が乗っている厨子入の八幡馬(写真21・22)は、同じく天狗沢の長一家の床の間に祀られていたものという。これも、前田家では、「サルノリ」と伝承されている。

(3)馬に人形がまたがっている「八幡馬」の古形——小井川潤次郎蒐集品——

小井川は、大正八年か九年に当時の孫作・前田松次郎(明六〜昭十二)に昔の型の八幡馬(写真23)を作つてもらつたという。そのことから八幡馬の来歴を推測して、「流鏑馬の長馬あけうまだというのは松次郎の孫作が射手衆を乗せた馬を作ってくれたことからでも間違いないと思う。これを武井武雄が猿乗りということにして紹介したので、ものがこんがらかつた」と記している。言い換えると、発祥の地・天狗沢では、流鏑馬の長馬を模して木馬を作り流鏑馬が行われる八幡宮の名を冠して「八幡馬」と称し、人形が騎乗したものを「サルノリ」と呼んでいたということになる。

筆者は、小井川家のご厚意で、潤次郎蒐集の八幡馬を見ることができた。その中に松次郎が作ったものも、明治の古型(写真24)と言われるものもあった。

松次郎の孫作が作った古形の八幡馬は、流鏑馬の長馬を模して作ったという馬に人形が乗つたものであった。

その人形は、流鏑馬の射手衆を象つたものであるというが、人形の手の形は簡略化された猿が乗っている形の「猿乗り」によく似ていた。

## (4)八幡馬の創始伝承と「サルノリ」

八幡馬の創始については、別の伝承もある。『デリーー東北』が八戸の市制施行五十周年記念に特集した「八戸の暮らし」(昭五十四年五月二十一日掲載記事)<sup>40</sup>に市内吹上の木村任太郎の談として次のような八幡馬の由来が記されていた。「わたしの母の実家にあたる、田面木の前田亀太郎の家で代々作っていました。なんでも、天狗沢にある前田の本家の大きな屋敷の池から、馬に烏帽子をかむった人が乗り、手綱のついた古い木製品が出たんだそうです。そこで、これは尊いものだという訳で、さっそく天狗様と呼んで祠に祭ったらいいんですな。(中略)八幡駒は、それをもとにして作ったと聞いていますよ。(中略)昔は、笹子、天狗沢、田面木のほかに八幡でも作っている人がいたくらいで、二十人近くが八幡様のお盛りに店を並べました。んでも神社の門の内に入って売るのを許されたのは、前田与平さんだけでしたな。名人ということよりも、初めて八幡馬を作った家柄だったからのです。」とある。この話は、畑野が言う八幡馬由来書の記述『承久二年(一二二〇)に京から一人の木工師が旅して来て是川村の天狗澤に住みつき、木工や塗り物を業としていた。ところが部落の溜池の水換え作業の際に、泥の中から馬型の木片を拾い、それを手本に木馬作りを思い立った』を補足する貴重な伝承と言えよう。

この木村談話にある、池に落ちていた古い木製品は、江戸期には「蒼前様」に対する篤い信仰があった土地柄と形状から「蒼前様」であった可能性は高い。しかし、氏神社である「天狗山神社」に因んで天狗様として祀られたと語られている。さらに、貴人が乗った馬型を手本とした木馬は、蒼前様にもなりえたとも考えられる。馬に烏帽子をかぶった人が乗り、手綱のついた古い木製品の形状は、孫四郎家の神棚に祀られていた貴人が騎乗している「サルノリ」(A)とも、櫛引の清水五右衛門家の神棚に祀られていた八幡馬の蒼前様とも形状が重なるものである。



写真25 櫛引八幡宮の護符「猿田彦様」

(5)「サルノリ」と馬の守護「猿」

「サルノリ」という呼称であるが、小井川が述べたように武井の紹介によりこの呼称が定着したのであろうか。八戸全域を歩き様々な民間伝承・信仰等について書き残した小井川は、八幡馬についても同様で、頻繁に笹子の大久保家に人をつれて来たり、話に訪れていたと直次郎氏から聞いた。天狗沢にも当然足を運んでいるに違いないから、その言は信頼にたる。やはり武井が招いた混乱なのかもしれないが、真偽は不明である。

しかし、後述のように猿は馬の守護をするものという民間信仰もあり、山の神様の御使いともいわれている。「はじめに」の項でも紹介したように、猿を以て厩馬の安全の手段としたことは、古くから広範に行われている風習であると柳田國男も述べているが、古来より、猿は馬を守護するとされ、厩の守護として猿を飼い、正月には厩の祭を行い、猿が馬を曳いている図を厩に掛け、馬を災厄から守ろうとする習俗がある。また、猿の頭蓋骨を厩の魔除けとして用いる「厩猿信仰」もある。

猿の頭蓋骨は、奥州市前沢の「牛の博物館」にも展示されているが、平成二十二年に岩手県九戸郡洋野町大野村の農家の台所の神棚で「厩猿」が発見されたという。記事によると、この厩猿は、昭和五十六年頃まで厩に祀られていたもので、頭蓋骨はニホンザルで江戸時代には祀られていたと推測されている。厩猿信仰は、火災防止や牛馬の無病。安全を願って厩に祀ったもので、岩手県では約三十件確認されているという。<sup>(4)</sup>

「猿駒曳護符」は、岩手県の早池峰神社や八戸の櫛引八幡宮にもある。櫛引八幡宮は、「大黒様」「八幡宮寶印」「猿田彦様」「猿駒曳護符」を三枚組で授与、左から神棚の下に貼るようにと指示している。このことは、同神社においても馬の守護を担っていた証ともいえよう。

孫作の氏神社である天狗山神社の祭神は、猿田毘古大神である。また、先述の二、(一)(2)天狗沢・最後の八幡馬製作者の項で記した、孫四郎家の前田長吉(競馬の騎手になり、最年少二十歳で三冠を制した人物)は、サルキチというあだ名をつけられるほど、馬を自在に操る技量を持っていたという話がある。このようなことから、この「サル」とは、神様もしくは神の使わしめをさしているのかとも考えられる。

天狗沢でいつ頃から「サルノリ」と呼ばれていたのかわからないが、少なくとも「サルノリ」の蒼前様が馬産農家では親しまれていたという証左にはなるう。

## (二) 八幡馬の源流と蒼前様

(1) 「蒼前様」として祀られる「八幡馬」

① 清水治五右衛門家の「蒼前様」(貴人が騎乗)

櫛引の旧家である清水家の蒼前様は、かつては厩に祀られていたというが、馬がいなくなったためか、厩から台所の神棚に移して祀っている。厨子に入った蒼前様は、馬にまたがっている烏帽子直垂姿の貴人で、木彫の馬と共に祀られている。清水家の蒼前様は、後に郷土玩具となった八幡馬に乗っていたのである(写真26・27)。

② 孫四郎家の「サルノリ」(貴人が騎乗)

孫四郎家は、大きな直屋の農家で、戦前は常時七、八頭の馬を飼っており、昭和四十年頃まで馬がいたという。当然ながら「蒼前様」もお祀りしていたはずである。

蒼前信仰を調べる以前は、神棚に祀られていた貴人が騎乗した八幡馬ということと、天狗様か一族の守護神ではないかと考えたこともあった。しかし「蒼前様」調査を経た現在、この八幡馬の「サルノリ」(A、写真19・20)は、馬の守護神である「蒼前様」として祀られていたものと言えるだろう。形状や祀られていた場所、さらに後年奉納されたこと等もあるが、何よりも先述した櫛引の清水家の神棚に祀られていた八幡馬の蒼前様と姿・



写真26 清水治五右衛門家の蒼前様



写真27 同上

形がきわめて類似しているからである。櫛引の清水家では、天狗沢の孫作一族に依頼してこの蒼前様を作ってもらったのではなからうか。

前田長一は、何故に神棚と共に孫四郎家の「サルノリ」を櫛引八幡宮に奉納したのであろうか。お祀りができなくなるようなら蒼前様に帰って頂くという想いから、魂抜きをしてもらい、氏神様とか関係ある神社に奉納するという話を調査の過程で聞き、実際に複数の祀り上げをされた蒼前様を見してきた。長一も家で馬を飼わなくなり、自身も老齢となってきたので、代々祀っていた尊い「蒼前様」を、ゆかりが深い八幡宮に納めたということではなからうか。

孫四郎家の床の間に祀られていた武者顔の貴人が騎乗している「サルノリ」(B、写真21・22)についても、(A)と呼び方が同じで、人形は異なるものの、床の間に厨子入りでおかれていたことから、これも神像として製作されたものと推察できる。人形の違いは、創作年代の違いかもしれない。『青森県の民間信仰』<sup>⑫</sup>に掲載してあった

三戸の蒼前像とも似ている。

人形の顔や衣装から見ると、

孫作・前田松次郎が小井川に伝えたように流鏑馬の射手象を象ったのかもしれない。もしくは、当家が江戸時代に苗字帯刀を許された名家であった孫作の一族で、先祖は吉野から来たサムライであったという伝承により、孫四郎家の

先祖の姿を神格化して彫ったとも考えられるが、詳細は不明である。

孫四郎家のサルノリが作られた時期・作者は、伝承や実見した際の形状等から、(A)は、江戸末期～明治初期頃(一五〇年前位)の孫四郎が作ったものではないだろうか。(B)は、明治後期～大正時代頃(二二〇年前位)に、第四四代孫四郎・前田菊松(安政四～昭和十二年)が作ったものではないかと推測している。

現存する八幡馬の古形と伝承

時代	大正時代	明治時代	江戸時代(末期)			
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・承久二年(一二二〇)京から来た木工師が是川の天狗沢に住み木工、漆工を業とする。池から出た馬形(貴人騎乗)をもとに木馬(後の八幡馬)を作り、櫛引八幡宮のオサカリ(例大祭。流鏝馬がある)で売る。</li> <li>○孫四郎家のサルノリ(A)(写真19、20)創始伝承と重なる形(江戸末期の孫四郎の製作か)</li> <li>○清水家の蒼前様(写真26、27)孫四郎家のサルノリ(A)に類似(孫四郎家製作か)</li> <li>○小井川潤次郎蒐集品(写真24、製作地不明)</li> <li>○孫四郎家のサルノリ(B)(写真21、22)(第44代孫四郎・菊松(安政4～昭和12)作か)</li> <li>○孫作・松次郎(写真23)(明治6～昭和11、小井川の依頼により古形を作る(流鏝馬の射手衆を象ったもの)</li> <li>・孫四郎家の八幡馬作り終焉(昭和10年代)</li> <li>・孫作本家、天狗沢を去る(昭和30年代)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大久保重吉(江戸末期～大正11)が、池から馬形の木片を拾い、それを手本として、農閑期の副業として創作</li> <li>○一刀彫の猿乗り(写真1)(第2代倉松(明治6～昭和14)かその姻戚の作か)</li> <li>○簡略化された猿乗り(写真18)(第3代岩太郎(明治36～昭和46)の作)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南部の馬産</li> <li>・蒼前信仰</li> <li>・木ノ下のお蒼前様詣りと絵馬市</li> <li>・櫛引八幡宮の流鏝馬神事</li> </ul>
				天狗沢(孫作一族)	備考	
				笹子(大久保家)		

昭和・孫四郎家分家の與吉死去で天狗沢における  
八幡馬製作は終焉（昭和30年代）

(2) 郷土玩具としての「八幡馬」への展開

小井川潤次郎蒐集品の中に「私のところにも一つお蒼前様として祀っていたのが、この土地でたった一つあるらしいそれがあるが……」<sup>(43)</sup>ということから推測すると、小井川も八幡馬を蒼前様として祀っていた家があることを知っていたように思われる。

なお、戦前の櫛引周辺には、蒼前様として祀られている八幡馬があったという<sup>(44)</sup>。櫛引八幡宮の例大祭で八幡馬を売っている大久保直次郎氏も、神棚にお祀りすると言って買って行かれたお客さんがいたと語った。

青森県立郷土館で学芸員をしていた三上強二は、八幡馬について「これはいまでは郷土玩具としての扱いをうけているが、もともとは祀る対象とされていたものであった。人形が古くは『ヒトガタ』とか『ヒトシロ（人代）』といわれていたのであるが、その意味では『馬型』『馬代』とでもいうべきものであったろう。（中略）塗りものをやる片手間仕事として、若い人たちの小遣い錢稼ぎに駒を作らせたと伝えられており、これが八幡馬のものになったともいわれているが、むしろ蒼前信仰から出たものといえるのではないだろうか。（中略）その馬の守護神が蒼前様であることから、馬を飼育している家では神棚に蒼前様の像や自分の持ち馬の像を作って祀ったものであった。その蒼前様の像がその後の八幡馬の原型になったであろうことは、現存するものの形を比較してみるとはっきりしている。従ってもとはそれぞれの手作り（自家製）であったのが、市に出して商品とするようになってから多少の飾り——最初は絵具による描彩——をつけるようになり、それがだんだんと量産されるようになって変化したものと思われる<sup>(45)</sup>」と述べている。

八幡馬の源流については、創始者孫作の何代目かが、櫛引八幡宮に奉納される神馬あるいは流鏑馬<sup>あびま</sup>の長馬を見

て彫ったものであると聞いた小井川の話が定説のようになっている。創始者孫作本家の伝承は傾聴に値する。製作してもらったとされる八幡馬の古形の形状を見たが、神像というよりは、やはり孫作の言うように流鏑馬を模した郷土玩具と思われた。創始者分家である孫四郎家に伝わっている神像的な人形とは明らかに異なっていた。馬の守護神である蒼前様の像が八幡馬の源流だという三上の説もある。右に記した三上説については、紙幅の関係からか実例や根拠が挙げられてなかったが、自身の多数の見聞をもとに蒼前像が源流であるとし、もとはそれぞれの手作りであったのが、市に出して商品とするようになってから飾りをつけるようになり、徐々に量産されるようになって変化してきたものと思われる」と述べたことは、筆者が実見した古い蒼前像たちから考えてみると説得力がある。

また、三上の同文が掲載されている同紙に八幡馬の写真が掲載されているが、そこには「背には鞍(くら)を据えているが、古いものはこの背に蒼前様に乗ったものがある<sup>46</sup>」との記述もある。

孫四郎家の神棚に祀られていた「サルノリ」(A)と櫛引の清水家が「お蒼前様」として古くから祀ってきた八幡馬が、最古の形に近いものと筆者は推測している。小井川が、大正八年か九年に当時の孫作・前田松次郎に作ってもらった八幡馬の昔の形より古いと考えられる。

八幡馬草創期の源流は、蒼前神と考えられる。しかしながら、蒼前神像として製作された八幡馬は、たとえ、「蒼前様」としての八幡馬が求められたとしても、彫ることのできる人の技量・時間・材料等の面からみて量産は難しかったであろう。

小井川が聞いた何代目かの孫作が知っていた古き時代の形は、櫛引八幡宮との深いつながりを表出している。八幡宮の例大祭の市で、「八幡馬」を子どもの数だけ買って、神社で祈願したものを家に持ち帰って神棚に供え、一年間無事に過ぎると神社に奉納して、新しいものを求めるという一年の「循環」が出来ていた。この習俗の普及は、八幡馬製作者にとって生活を支えることでもあったろう。同時に、八幡馬が櫛引八幡宮信仰の広がりにも

寄与していたことがわかる。

従って、「八幡馬」は、蒼前神が源流と考えられるが、創始伝承に地域の蒼前信仰、加えて櫛引八幡宮との絆との融合から生まれた木馬と考えるのが自然であろう。言い換えると、八幡馬は蒼前信仰という土壌から生まれ、櫛引の八幡宮のもとで、育成された木馬であった。しかし、馬産業の衰退は製作者の生活をも圧迫し、馬の信仰という要素は影のようになり、時代を経ると子供が健やかに育つように「尚武」を祈って台車付きの木馬が買いかめられたという。つまり、愛馬の守護から子どもの守護——健康祈願や遊戯面を強調する形に変化してきたといえよう。

### おわりに

深く強い祈願を行う際に、「生馬の献上」を行うという古代の献馬習俗<sup>①</sup>、朝廷の大祓え（八月と十二月）の象徴は馬であったこと<sup>②</sup>、馬の関わる民間信仰、「絵馬」「木馬」「わら馬」等の馬形を奉納する習俗の発祥から見えて来るのは、古い時代にあった「馬」に対する人々の信仰である。

柳田國男は、「絵馬と馬」で「……我々の祖先が特に馬の絵に一種の宗教的興奮を感じなかったなら、エマといふ語も実は出来なかつたかもしれぬのである。」「海から渡って来たらしい日本人であるが、不思議に神々のみは馬に騎つて、高い山の嶺から降りたまふものと信じて居た。それが飾り馬の背上に、未だ書かれざる神を幻覚した理由でもあれば、同時にまた絵馬を大神への贈呈の如く、考へるに至つた原因でもあるが、最初は是もまた神徳賛歎の、主要なる記念方法であつたのである。」と述べ、馬の姿を描いた「絵馬」や木・わら等で作つた馬を奉納することは、神への強い祈願を表出する手段であり、「馬」は祈願の象徴でもあつたという。

加えて、「馬」は戦前までの日本人の暮らしの中でも農耕や運搬等の生活を支える存在であつた。特に東北地

方では、人と同じ屋根の下に厩を設けるなど、家族同然の大切な家畜であったため、馬を供養する馬頭観音や馬を守護する蒼前信仰が広まった。八戸は、蒼前信仰が地域に深く根付いており、「蒼前様」が家々と村々に祀られている。その八戸の郷土玩具である「八幡馬」の源流を尋ねて、明らかになったことは、後に「八幡馬コ」と呼ばれるようになった木馬（馬コ）は遊具・玩具として製作されたものではなく、飼育している愛馬の健康や安全、順調な成育等を願う、人々の強い願望や祈りが込められたものであったのである。この木馬の源流は蒼前信仰のご神体である蒼前様で、さらには、絵馬と同様、神様への願いの象徴としての信仰から生まれた木馬であった。しかし、時代を経て、馬産業の衰退により家や地域から馬がいなくなり、愛馬の守護より子どもの守護や家内安全を強調するようになった。その形も親子馬や牽いて遊ぶ遊具的な要素が加わり、さらに夫婦円満を祈願する形にも変化してきているが、八幡馬の伝統を引き継ぎ、手作りで製作を続けている大久保直次郎父子の使命感、さらに機械製作社（株式会社 八幡馬）の製造により、今も八戸の代表的な郷土玩具となっている。

また、我が国で神と人をつなぐ特別な動物と思われる「馬」であるが、郷土玩具の世界でも、その源流をたどれば、神様の乗り物であったことを明らかにできたことと思う。

### 【付記】

八幡馬をめぐる数年間の調査で、多くの方々にお世話になりました。特に、八幡馬製作者の大久保直次郎氏・窪田優子氏、八幡馬創始者孫作の分家・孫四郎家のご子孫にあたる前田貞直・ツエ子ご夫妻、前田カヨ氏、八幡馬の蒼前様を祀られている榊引の清水治五右衛門氏、小井川潤次郎氏ご遺族の小井川年夫氏・小井川弓氏、榊引八幡宮宮司の營田稲太郎氏・神職の高島常美氏、各氏のご芳情に深く感謝いたします。

また、資料収集に多大なご協力を頂いた『デリーー東北』新聞社の松浦大輔氏、八戸市文化財審議委員副委員長の滝尻善英氏、御前神社の浪打磐根宮司、八戸市文化財審議委員元委員長の上野末蔵氏、八戸市教育委員会の小林力氏、八

戸地域神事流鏑馬再興会の黄綿昶行氏、八戸市立図書館の野沢江梨華氏、青森県史編纂室の福島春那氏、成城大学民俗学研究所の松崎憲三所長・林洋平芸員・薄場明子氏・広瀬晴美氏の各氏に厚くお礼申し上げます。

## 註

- (1) 小井川潤次郎(明二十一〜昭四十九)は、八戸郷土研究会を創設して、採集調査を行い、八戸の郷土研究に尽力した。八戸についての著作が多数ある。
- (2) 『考古学雑誌』二巻十号(『定本柳田國男集』二十七卷 三二六〜三三二頁)
- (3) 中野渡由美子「<sup>13</sup>馬の守護神たち」『デリーー東北』「南部馬と人」平成二十六年七月十日
- (4) 大久保学「<sup>1</sup>駿馬の郷」『デリーー東北』「南部馬と人」平成二十六年一月九日
- (5) 成田敏「お蒼前様」『デリーー東北』ふるさとロマン「南部の信仰と行事(3)」昭和六十一年十一月二十三日
- (6) 前掲(4)、『青森県の民間信仰』(『青森県民俗資料図録』第三集)昭和五十一年 青森県立郷土館 五九頁
- (7) 前掲(5)
- (8) 滝尻善英「八戸地方における蒼前信仰」『歴史読本』昭五十六年十月 新人物往来社
- (9) 青森県民俗文化財等保存活用委員会編『青森県無形民俗文化財等記録第四集 気比神社の絵馬市の習俗 十和田のトシナ』平成二十五年三月 青森県民俗文化財等保存活用委員会 四頁
- (10) 『青森県史 民俗編 資料 南部』第二節 蒼前信仰 平成十三年三月 青森県史編さん部会編 青森県 三二八〜三三六頁
- (11) 『八戸写真帖 明治・大正・昭和・平成』平成二十三年五月 八戸観光コンベンション協会 一六・二二二頁
- (12) 館花久二男著『近代八戸地方の農村生活』平成十六年十二月 八戸市 七八〜八八頁
- (13) 八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史 民俗編』平成二十二年三月 八戸市 四〇九頁
- (14) 滝尻善英執筆『はしかみの民俗と信仰』平成十五年二月 階上町教育委員会 一三〜一六頁
- (15) 八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史 地誌編』平成二十四年三月 八戸市 五一〇頁

- (16) 八戸市史編纂室編『館地区の民俗』平成十九年三月 八戸市史編纂室 六九頁
- (17) 前掲(16) 八六頁
- (18) 八戸市史編纂室編『大館地区の民俗』平成十六年十二月 八戸市 九三頁
- (19) 前掲(18) 九五頁
- (20) 八戸市史編纂室編『根岸地区の民俗』平成十六年六月 八戸市 七五頁
- (21) 清水治五右衛門(昭十八生)談及び青森県環境生活部県史編さん室編『馬淵川流域の民俗』一八七～一八八頁
- (22) 上野末蔵(昭十一生)談
- (23) 八戸市史編纂室編『上長地区の民俗』平成十九年三月 八戸市史編纂室 六一頁
- (24) 前掲(18) 九四頁
- (25) 前掲(18) 九六頁
- (26) 前掲(20) 七四頁
- (27) 畑野栄三著『全国郷土玩具ガイド』① 平成四年一月 婦人会出版社 四二頁
- (28) 榊引八幡宮配布「八幡馬」の解説シートの要約
- (29) 『デリーー東北』昭和六十一年二月二十三日「ふるさとロマン・親の願い」三上強二執筆
- (30) 「榊引八幡をめぐるって」『旅と傳説』五卷三号 昭和五年三月
- (31) 小井川潤次郎著『清水寺界隈』(八戸郷土叢書) 昭和七年 八戸郷土研究会
- (32) 『デリーー東北』「町内風土記」270 是川・天狗沢 昭和四十三年六月三十日掲載及び分家談
- (33) 前田カヨ談
- (34) 島田明宏著『虹の断片』かけら 平成二十六年 産経新聞出版
- (35) 『デリーー東北』「八戸の暮らし」④ふるさとの名産 木村任太郎談 昭和五十四年五月二十一日掲載 文・小寺隆韶
- (36) 『日本郷土玩具(東の部)』昭和五年 地平社書房 一〇頁

- (37) 前掲(26) 三八頁
- (38) 前掲(29)
- (39) 『デリーー東北』「八幡の馬」④ 昭和二十九年一月六日掲載
- (40) 前掲(34)
- (41) 『デリーー東北』平成二十二年六月十日記事
- (42) 前掲(6) 六二頁
- (43) 前掲(29)
- (44) 榑引八幡宮権禰宜の高島常美が先代宮司から聞いた話
- (45) 前掲(28)
- (46) 前掲(28) 掲載写真の説明文
- (47) 『常陸国風土記』(奈良時代編纂)に、幣みくろの一つに「馬一疋」と記されている等、古文獻の中には、多々「献馬」記事が見られ、古代に「生馬の献上」があったことがわかる。また、雨乞・日乞の術的儀礼としても神馬の献上が行われたようで、『統日本紀』天平宝字七年五月庚午の条には、「丹生河上の神には黒毛の馬を加える。早すれば也。」と見え、降雨祈願として水を司る神・丹生川上社に黒毛の馬を献上している。奉幣のみの祈願で効なき場合に、献馬を加えていることが多く、献馬の場合それだけ深く強い祈願だったと推測できる。
- (48) 小島瓔禮は、「祓えの象徴としての馬」(季刊『悠久』73号 平成十年四月 おうふう発行)で、かつて朝廷の大祓え(八月と十二月)では馬が重要な役割を演じていたこと、ハラエのしるしである「祓つ柱」(はらえつもの)の代表は馬であり、八月の大祓えの馬から「八月一日の八朔行事に馬を献上する風習があった」のではないかと推測した。
- (49) 『アサヒグラフ』十四卷二号、昭和五年一月八日(『定本柳田國男集』二十七卷、三四二頁)